

ぴとっ

蜜瀬かえで 著

いつもの放課後。

いつもの帰り道。

正門までの目抜き通りで。

「ね、玉置」

「何？」

ぴと。

指先に、張りのある頬の感触。

玉置の肩を叩いたわたしの右手の人差し指が、玉置の頬にぴとっと当たっていて、

「えへへ。じつはこれ、前から一度やってみたかったんだ」

そうやって頬を緩ませるわたしに対し、玉置は、

「——ずるいつ」

……へ？

「それ、あたしもずっとやってみたかったのに！」

なんて、頬を膨らまされても……。

というか、玉置もやったことなかったんだ、これ。意外。

「……じゃあ、やってみる？」

「いいのっ！」

ただこれって普通、気づかれずにやるからこそおもしろいんだと思うんだけど……。

「じゃあ、あたし肩叩くから、そしたらこっち向いてね」

玉置がいいならそれでいいんだけど……。

『やるよ』って言われてやるのって、ちよつと変な感じ。

「それじゃー……………未佑っ」

「なあ——」

『なあに』って言おうとした途中で、玉置の人差し指がわたしの頬に当たる。

「へへへ」

そして、得意満面の玉置の顔。

それに思わず笑っちゃいそうになるのを堪えていると。

わたしの頬を指で押しながら玉置が言った。

「未佑のほっぺって、なんか、フワフワしてるね」

「……………。それって、わたしが太ってるってイミ？」

「違う違う！」

「………本当？」

「ほんとほんと！」

「……………なら、いいけど」

まあ、確かに、わたしのほうは玉置のほっぺ、これまでに何回か、こう、えーと、『触った』？ ……『つまんだ』？
そう。つまんだことがあって。

『わたしと違って、張りのあるきれいなほっぺだなあ』
なんて、うらやましく思うこともあったりするわけで。
そう思ってみたら、

(むゝ)

「……。未佑、なんでさっきから無言であたしのほっぺた突っついてくるの？」

「……………。ずるいのはわたしじゃなくて、玉置のほうね」
「いきなりっ！？ てか、なんでっ」

とか言いつつ、玉置も仕返しにわたしの頬を突つつき返してきて――。

「きゃっ、ちよつと、玉置っ」

「へへへ、仕返し仕返し」

「もう。なら、わたしだって」

「ひゃうっ」

「――ぷっ。『ひゃうっ』だって」

「むゝ。もー、えいっ」

「きゃ。……やったわね。えいっ」

「へへへん、当たらないよーだ」

「こら。避けるの禁止！」

その日はそんなふうに二人して頬をつつき合って、正門でわかれるまでの道を歩いたのでした。

日も長くなった夏の夕暮れ。